

【天国への手紙

2018年11月25日放送分】

憧れの竹村君へ

ラジオネーム：たくみ

我々が大学に入ったのは、1968年の事。

一年もすると、仲のいい奴、その合わない奴、

まるで話した事の無い奴と、何となく棲み分けが出てきます。

私はそれまで成績が良いとか、スポーツがすごいとか

何か同じ男友達に憧れるという事はありませんでした。

しかし、竹村君だけは単純に「格好良いな、あいつ」と

思ったものです。

まず、昔のスター・小坂一也にもちょっと似た、

若いのに渋さのある良い男でした。

さらに、当時ファッション化社会の始まりで、男性服飾ブランド

が次々に登場した時代、竹村君はその中でDOMONという

渋い英国風ブランドを実にさり気無く着こなし、

語り口も静かで、落ち着いていました。

高校生の頃から大人びた仕事のアルバイトを

沢山経験していた事で、世慣れた雰囲気が出来た様なのです。

落ち着きがなく、まだ子供じみた気分が強かった私は、

単純にそんな竹村君のありように憧れたのです。

同じクラスの彼女までが「竹村君は素敵」とあからさまに言っ

たも癪でしたが、私自身も「まー、竹村じゃしょうがないよな」

と

思ってしまう位なのです。

卒業して3、4年した頃、路上でバッタリ再会しました。

彼は意外にも、輸入食品販売の会社に就職して、年齢が増えた分

落ち着きある格好良さを、さらに磨きをかけていました。

その後数回一緒に呑んだ位で、私も幾つかの転職などを繰り返して多忙な人生を送るうちに、会うこともなく歳月が流れていきました。

あれは50代半ばの頃だったか：かつての大学仲間の数人が連絡を取り合い、十数人が東京に集まる機会を持ったのです。そしてその時知ったのです。

竹村君は食品輸入の仕事でアメリカに行き、彼の地で自動車事故に巻き込まれて亡くなったことを。

一人が「死んだのは残念だけどさー、シカゴ郊外のハイウェイでってというのは何かドラマチックだよなあ」と言いました。

そして何となく『我々の憧れ、竹村に』と、竹村君と、そして遥か遠ざかった若い時代に乾杯したのです。

竹村君、渋く格好いい君が笑った時の優しい雰囲気は最高でした。クラスの女性が竹村君争奪戦を繰り広げたのも無理はなかった。

私は、あの頃から今も『格好良い』というそんな要素を一つも身に着けられないままで過ぎてしまいました。

もし天国で出会うことがあっても…するいよなあ。

君は40代後半、こっちは70歳つになっっているだろう…  
さらに差がついているね。

良き友に、季節外れの黙祷を捧げます。

リンクエピソード

〈 Paperback Writer 〉 〈 The Beatles 〉